

☆会員動向 (会員数：113社 2003年2月現在)

社名変更

▶昭和ディー・ディー・イー製造株式会社 → 昭和電工エラストマー株式会社  
(2002年11月1日付)

退会

▶サンノブコ株式会社  
(2003年1月31日付)

☆JRCC 2002年度末の予定

地域対話

第4回千葉地区	2月6日(木)
第3回鹿島地区	2月14日(金)
第2回富山・高岡地区	2月19日(水)
第2回大阪地区	2月26日(水)
第3回岡山地区	2月27日(木)
第2回兵庫地区	3月11日(火)
第1回愛知地区	3月17日(月)

会員交流会

3月19日(水) 岡山コンベンションセンター

編集後記

●● 予定よりもやや遅れているが、PRTR法に基づくデータの公表が間もなく行われる。データの公表を受けて、地方自治体などでは、さらなるPRTR制度の普及・啓発を図るべくセミナーなどの開催が数多く計画されている。

●● PRTR法により、行政、市民、事業者が化学物質に関する情報を共有することになり、リスクや排出量の削減についても共通のデータに基づいて話し合うことができるようになるが、それぞれの立場の違いを埋めるのがリスクコミュニケーションの場と言えよう。その意味で、企業の一員としても市民の立場でも、上記のようなセミナーなどの機会を見つけて積極的に参加する姿勢が望まれる。

(HK)





# レスポンスル・ケア 報告書2002 報告会を開催

2002年12月16日(月)東京(発明会館)で、12月17日(火)大阪(大阪YMCA会館)で報告書報告会を個別事例報告とパネル討論を交えて開催しました。東京会場には199人、大阪会場には158人が参加され、うち会員は東京94人、大阪77人でした。

## 両会場とも以下の次第に沿って行われました。

1. 挨拶
2. 報告書発表…①概要説明 ②個別事例報告
3. パネル討論…「循環型社会をめざして」

## 挨拶

東京では浅尾・JRCC企画運営委員会委員長、大阪では館・JRCC副会長と大久保・関西化学工業協会会長が開会に際して挨拶をされました。

### 浅尾委員長、館副会長

- PRTRデータの公表に伴い、リスクコミュニケーションへの取り組みが現実のものとなる。
- 個別企業の環境報告書をはじめ、さらに積極的な情報公開が求められる。
- PRTR法の一つのねらいである、化学物質に対する自主管理の改善という点でも、レスポンスル・ケア活動の重要性が増してくる。
- 本年度から正式にスタートした「レスポンスル・ケア検証制度」を速やかに順調な軌道に乗せることによって、社会の信頼をさらに高めていきたい。

### 大久保会長

- 電気・電子産業をはじめ、自動車、建設などあらゆる産業界からの、素材供給者としての化学工業に対する期待の高まりを強く感じる。
- 一方で、化学工業がその役割を十分に発揮するためには、環境負荷の低減、環境適合性の向上など、さまざまな要件を満たしていくことが求められる。

## 個別事例報告

### 「循環型社会への貢献」

東京…鈴木 章黄 帝人 榎 理事

大阪…佐藤 和弘 帝人ファイバー(株) 営業部長

- 循環型産業として価値ある製品の提供＝従来の品質・価格・納期＋環境負荷
- 企業理念「Quality of Life」のもとで、さまざまな環境安全活動を進めている。
  - 1) 守り＝ゼロへの挑戦、レスポンスル・ケア、ISO、OHSAS
  - 2) 攻め＝環境保全への積極的貢献、環境ビジネスを拡大して世の中に貢献
- 「地球環境に優しい商品開発」と「原料リサイクル技術」という『リサイクル両輪構想』
- 環境ブランド「エコベットEC100」：くり返し何度もリサイクルできるというコンセプト

- 繊維製品は複合素材で、綿やウールの混紡、ボタンやファスナーの混入などポリエステル繊維のリサイクルには大きな技術的課題があったがクリア。
- PETボトルにも何種類もあるが、新原料リサイクル技術の開発により、ボトルtoボトルの事業化を2003年度から予定。

## パネル討論

### 東京会場

パネラーに①長門利明(環境省リサイクル推進室長)②土居敬和(日本容器包装リサイクル協会理事)③水原博子(日本消費者連盟事務局長)④小峰且也(環境新聞社取締役編集局長)⑤鈴木章黄⑥島田章(JRCC企画運営委員会幹事会主査、三井化学(株)環境・安全・品質企画管理部長)の各氏を迎え、鳥居圭市氏(社)日本化学工業協会常務理事)の司会で行われました。

はじめに行われた、JRCC外からのパネラー4人の意見表明は概要以下の通りでした。

**長門** (1)「循環型社会の形成推進のための法体系」ということで、「循環型社会形成推進基本法」をはじめとした法律を紹介。(2)「容器包装リサイクル法」と化学業界への期待。(3)化学物質についてどのように一般の方に分かりやすく伝えるかが重要。

**土居** (1)「容器包装リサイクル法」にもづくリサイクルの現状。(2)高炉、コークス炉、化学原料化による処理の比重が極めて高い。

**水原** (1)循環型社会をめざすときに、消費者は何をしなければいけないのか、本当に必要なものを買っているのか、そのものが地球環境にどのような影響を及ぼすか、ということも知る努力が必要。(2)事業者は拡大生産者責任の考え方に立って廃棄物をできる限り出さない、責任を持って処理することを考えてほしい。

**小峰** 循環型社会をめざす動きの中での問題点を紹介。(1)リサイクルという名のもとで行われている、産業廃棄物の不適正処理や不法投棄。(2)優良産廃処理業者の育成。(3)油化技術における塩ビ除去の前処理コスト。(4)新技術の実用化に当たっての政治的問題、住民の同意や用地の確保など。

引き続き会場の参加者からの質問にも答えながら、討論が行われました。

### ▶▶▶PETのリサイクルに関する国際的な比較、コストの問題、分別の負担などについて。

●PETボトルのリサイクルで見れば、日本は進んでいるし、エネルギーコストも新品を作るよりは少なくすむ。分別の負担もそれほど大きくないが、他の容器包装プラスチックとなると難しい。

### ▼東京会場



- 「リサイクルには費用がかかる」という意識を広めて、その費用を削減するには廃棄物の発生抑制とリユースだ、という考え方もあっていい。
- リターナブルがすべて正しいというのではなく、もっと広範な考え方をとり上げ、分析してみようかという議論がどんどん行えるようにすべきでは。
- 耐久性のある製品をつくって、それを長く使うということが環境に負荷を与えないことになる。

### ▶▶▶化学業界への注文、提案

- 化学メーカーの役割は(1)事業所の中における廃棄物の削減や3Rの推進(2)技術開発(3)環境負荷の低い製品、環境に配慮した製品の開発。
- 例えば環境ホルモンのように、何か新たな問題が出てきたときに、おおととの化学産業界が迅速に対応して欲しい。また、率直な情報開示と対話を心がけて欲しい。
- 化学物質の安全性の評価に際して、専門家だけによる評価ではなく、外部の方の評価を仰ぎ、より広い範囲で理解を得ることが必要。

### ▶▶▶わかりやすい環境報告書について

- 活動内容・成果が正当に評価できる記載が重要。
- あれもこれも欲張りすぎると八方美人になってしまう。今年はこの目的でつくろうというようにして、5年、10年でまとめる報告書にするという考え方もあってよい。
- 化学は日本語だけでは表現できない部分がたくさんあるが、特に略号などに気をつけて、日常使っている言葉に近づけていく努力が必要。
- レスポンスル・ケアという言葉自体が日常語ではないのでわからない。横文字をできるだけ日本語で表現することが大事。

### 大阪会場

## パネル討論

パネラーに①松尾明(大阪府循環型社会推進室長)②土居敬和③飯田秀男(全大阪消費者団体連絡会事務局長)④駒橋徐(日刊工業新聞社編集委員)⑤佐藤和弘⑥稲葉憲治(チバ・スペシャルティ・ケミカルズ(株)安全環境部長)の各氏を迎え、鳥居圭市氏の司会で行われました。

はじめに、JRCC外からのパネラー4人から意見表明がなされました。

**松尾** 大阪府の新環境総合計画についての紹介をはじめ、大阪府の一般廃棄物排出量が1人1日当たりの量として全国一で削減がなかなか進まないということや、ダイオキシン汚染問題、建設系廃棄物の不適正処理、不法投棄問題など大阪府の抱

### ▼大阪会場



える悩みにも触れた。大阪エコエリア構想や大阪府循環型社会推進条例など将来構想についても紹介。

**土居** 「容器包装リサイクル法」に基づくリサイクルの現状についてデータによって説明、今後は市町村が集めるPETボトルなどの量が課題と指摘。

**飯田** 内閣府が行った「循環型社会の形成に関する世論調査」をもとに話題を提供。(1)「大量消費」という生活感覚は維持したい。出たものをどう処理するかに関心が高い。(2)市民は、「環境に負荷を与えないことに貢献したい」と考えている。一方で「現在の生活水準は維持したい」と願っている。

**駒橋** 循環型社会の形成に関連する諸法律、即ち「容器包装リサイクル法」をはじめ、家電リサイクル、建設リサイクルなどの現状と課題を紹介し、最後に現在検討されている自動車リサイクルに関する課題にも触れた。

引き続き、会場参加者からの質問にも答えながら討論が行われました。

### ▶▶▶「化学産業のリサイクルについてのあるべき姿」を中心にそれぞれの立場から意見が述べられました。

- リサイクルしやすい素材を考える必要がある。行政、リサイクル業者、製造事業者間の情報交換、連携をうまくやってバラバラな動きにならないようにすることも重要。
- リサイクルにはいろいろな組み合わせがあって良い。地域内ゼロエミッションという考え方もできる。一番大事なことはリユースであることを忘れてはならない。
- ゴミ処理の基準が自治体によってバラバラ、これを統一的なものにするのも是非考えてほしい。リユースしやすいという考え方でつくられた製品であれば、その考え方が消費者にもわかる情報公開が必要ではないか。
- 容器リサイクル一つとっても、自治体によって選別の程度がバラバラということも問題。
- 化学物質に関連して、一つは複数素材の分離をいかに容易にするか、もう一つは素材の単素材化を追求するということ。

## アンケートについて

今回は、アンケートを内容で二つに分け、報告会に対するご意見は当日ご記入いただいた回収し、報告書のものについては後日ご覧いただいた上で、ご意見をいただくという形にしました。

今回も様々なご意見をいただきましたので、今後の参考にしていきたいと思っております。





## 技術革新と レスポンシブル・ケア —持続可能な発展に向けて—

社団法人 日本化学工業協会  
日本レスポンシブル・ケア協議会  
会長 中西 宏幸

昨年、21世紀初めての「持続可能な開発のための世界サミット」が南アフリカのヨハネスブルグで開催されました。(社)日本化学工業協会は、国際化学工業協会協議会(ICC A)の一員として、レスポンシブル・ケア活動や、化学産業界の自主的国際共同プロジェクトである「高生産量既存化学物質の安全性点検プログラム」(HPV)、「化学品の安全性に関する長期自主研究」(LRI)などの報告、展示に参加、協力いたしました。その時のICC Aセクターレポートは、国連環境計画(UNEP)により22の産業界報告の中で最上位に評価されました。持続可能な開発への取り組みにおいて、化学産業界が社会の重要かつ欠くべからざるパートナーであるとの世界共通の認識を得たことは極めて大きな成果と言えるでしょう。

さて、レスポンシブル・ケア活動では「情報公開と社会との対話」を重要な柱の一つと位置づけており、日本レスポンシブル・ケア協議会(JRCC)として様々な対話活動を展開しております。化学産業界は、これまで多くの有用な製品の提供を通じて、豊かな社会形成に向けて貢献して参りましたが、同時に化学物質の管理についてその取り組みを広く社会に示し、相互理解を深めるための弛まない努力は、私たちに課せられた重要な役割であると考えます。

加えてわが国では、まもなく、化学物質排出把握管理促進法(PRTTR法)に基づくデータ公表が始まります。情報公開を基本とする社会との対話やリスクコミュニケーションを、一層実のあるものとして実践していくことが不可欠です。

また、PRTTR法は、事業者の化学物質に対する自主管理の改善を強く促しております。私たちは、今後も自己責任・自主管理の原則のもとに、自信を持ってレスポンシブル・ケア活動を拡大発展させていく必要があると考えております。

一方、JRCCでは昨年4月から「レスポンシブル・ケア検証制度」をスタートさせました。この制度は、活動の透明性を高めかつ活動の質を高めることを目的としており、情報公開と相俟って、社会からの信頼を更に高めることに繋がるものと考えます。

わが産業界を取り巻く事業環境は、依然厳しいものがありますが、私たち、化学に携わる者一同、技術革新とレスポンシブル・ケア活動の取り組みを軸に、化学産業の未来に対する確たる信念をもって、社会の持続可能な発展に貢献してまいりたいと思います。

## 学生との対話集会を開催

JRCCは、昨年から若い人たちとの対話を推進する意味で、経済商学系学生の団体「アイセック・ジャパン」との対話「環境交流会」を始めましたが、今回、理工農系学生のための国際インターンシップを仲介している国際NGO「エアステ IAESTE」とも、同様の対話の機会を持ちました。

★エアステ・ジャパン〔(社)日本国際学生技術研修協会〕との対話も「環境交流会」と銘打って、2002年11月27日(水)に日化協・会議室にて行いました。

エアステからは、東京工大、早大、慶大、お茶の水女子大、東京農工大、津田塾大、東京理科大学の学生15名(男子8名、女子7名)、JRCCからは、対話WGの委員6名と事務局から2名が参加しました。

対話は、学生側からの「エアステの概要紹介」、JRCC側からの「レスポンシブル・ケアとは」、JSR、三菱化学両社の「企業の活動事例紹介」のプレゼンテーションが行われた後、質疑応答、意見交換が行われました。

主な質疑応答の内容は、次のようなものでした。  
\*リサイクルについてはかなり進んできた感じだが、リユースの面では、ガラスびんの再利用は行われているものの、ペットボトルなどは一度砕いて別のものに再生している。その際に、余計なエネルギーを使っている。

→ペットボトルのリユースについては、海外では実例があるが、日本人は清潔好きで抵抗がある。生活者、使う側の意識が問題で、日本のペットボトルは薄肉化の方向で材料使用量の削減ということで動いている。

\*対話集会など、どのような形で参加者を集めているのか?

→(このとき参加されていた、コニカ(株)環境安全推進室北さんに前号・秋季号で紹介の「エコロジー・フェア」をご紹介いただいた)。初めての試みだったが、事業所所在地の市の公報に行事案内を載せていただき、事業所周辺の市民に参加していただいた。コニカの製品になじみはあっても、工場の中を自分の目で見るのは初めてという方が多かったが、「百聞は一見にしかず」との感想を述べておられた。

●「アイセック・ジャパン」のメンバーとの大阪で2回目となる「環境交流会」を2002年12月18日(水)に大阪市北区の堂島ビル・会議室にて行いました。

アイセックからは、大阪大、神戸大、京大、大阪市大の学生12名(男子9名、女子3名)、JRCCからは対話WG委員1名、大阪在住の会員5名、関化協とJRCC事務局から各1名の計8名が参加しました。

はじめにJRCC側から「レスポンシブル・ケアとは」と積水化学、三菱化学両社の「企業の取り組み事例」のプレゼンテーションが行われた後、質疑応答、意見交換を行いました。

意見交換で学生側から出された質問・意見には次のようなものがありました。

\*「わが社はこのように環境保全にがんばっている」と言われても、他の事業分野とも比較してみないと本当のところは分かりにくい。

→環境報告書など、業種・業態によって同じ切り口でデータを出しにくい面もあり難しいが、監査法人などがある観点で見た評価を行う動きはある。

\*3Rの活動があるが、企業として利益を上げなければならないこととつながっているのか。

→企業の事業活動のどの段階で3Rに取り組むかによって違うのではないかと。





# テクノアメニティの理念を實踐し、 持続可能な発展に 貢献することが目標です。

株式会社 日本触媒

常務取締役生産本部長

森本 豊さん



## 個性的な技術で新たな価値を創造する

—日本触媒の特徴から聞かせてください。

**森本** 当社では企業理念に「テクノアメニティ」という言葉を掲げ、技術を通して人間生活に豊かさや快適さを提供することに取り組んでいます。ほぼ全ての事業を自社技術で展開しており、気相酸化による、アクリル酸、メタアクリル酸、マレイン酸、酸化エチレンを幹として、それらの誘導品である高吸水性樹脂等のファイン&スペシャリティ製品を事業化しています。更に社名となっている触媒の技術を用いて環境分野にも進出しています。これらの製品を世界の隅々までお届けするというので、グローバルな事業展開を行っています。

—環境事業というのは……？

**森本** 最も典型的なものは自動車触媒でしょうね。それから脱硝、ダイオキシン類の分解、排ガス・排水処理等の技術を開発・企業化しています。他社でも環境対応製品は扱っておられるでしょうが、一つの事業部門として確立しているという点で、当社はユニークなのではないかと思えます。最近では、環境事業を行っていることに魅力を感じて入社を希望する学生も見られるようです。環境事業のみならず、キーテクノロジーである触媒に加え、高分子合成、有機合成といった個性的な技術で新たな価値を創造する国際企業を目指しています。

## レスポンスブル・ケアにより 共通の認識を持つことができた

—これまでの環境安全活動はどのようなものでしたか。

**森本** 化学業界で公害問題や事故が続発していたことを背景に1970年、製造所に環境管理室を設置しました。73年には全社的な対策を講じるために、社長をトップとした安全環境委員会を発足させています。その後、91年に企業理念「テクノアメニティ」、93年には「環境・安全に関

する基本方針」を制定し、95年にJRCCが発足すると同時に加入しました。ISO14001に関しては、2001年までに各製造所で認証取得を完了しており、現在は労働安全衛生マネジメントシステムに取り組んでいます。

—レスポンスブル・ケア導入当初に戸惑いはありませんでしたか。

**森本** 当時は私も工場にいましたので、何かまた難しいことを始めるのかなというのが正直な気持ちでした。しかし実際に活動してみると、これまで行ってきたことを体系化し、PDCAサイクルに則って進めていくというシステムが確立して、環境安全に関する取り組みがかえって判り易くなりましたね。今まで各現場でバラバラに行われていた活動をレスポンスブル・ケアによって一元管理することが可能になり、全社的に共通の認識を持つことができたと思います。

## 環境への貢献度が 研究開発の指標となる時代

—現在、特に力を入れていることは何ですか。

**森本** 企業にとって新規製品を早く開発・上市すること、既存製品のコストダウンを図ることが時代の要請となっていると思います。これらを実現するには今まで以上にリスクが伴う訳で、生産体制、研究開発等、あらゆる分野においてリスク・マネジメントを充実させていくことに注力しています。新規製品の開発や生産プロセスの変更の際には、環境・安全面への配慮や化学物質の有害性に関するデータ等について、事前審査を徹底して行います。一方、実施後の監査は各製造所長が定期的に行うものに加え、専務を委員長とする本社のメンバーが年に1回、現場を査察しています。その査察の中で保安防災のノウハウや技術の伝承をとりあげ、過去の蓄積を整理、体系化し、誰が見ても判るように文書、ファイルにまとめました。

—PRTR、環境会計に対する取り組みは？

**森本** 日化協のご指導もあり、PRTRについては法施行以前から対象物質の洗い出し、環境負荷低減を進めており、確実に実施しています。環境会計に関しては、最近1~2年の取り組みであり、今後検討すべき点が多いと考えています。

—貴社の特徴でもある環境事業の現状は如何ですか。

**森本** 一番進んでいるのは、触媒を利用した排ガス・排水の浄化です。ただし、これも段々と難しくなっており、例えば自動車の排ガス規制が厳しくなれば、それに対応する技術を開発しなければなりません。現在では、排ガスを排出しない燃料電池などの研究にも着手しています。このような事業は勿論ビジネスチャンスを逃さないという側面もありますが、常に社会の役に立つということを念頭に置いています。環境への貢献度が研究開発の一つの指標となる時代が到来したことを認識し、環境事業部に限らず、どの分野においても、それを意識した製品開発を進めています。

## 海外から学べる点は 積極的に取り入れていきたい

—社会とのコミュニケーションについて聞かせてください。

**森本** 成果の公表に関しては、ホームページと環境報告



▲夢・化学-21「夏休み子供化学実験ショー」に出展

書によって情報公開を進めています。地域とのコミュニケーションとしては、工場見学会の開催や各種イベントへの参加、消防訓練の公開等を行っていますが、まだ十分とは考えていません。今後、力を入れなければならないのはリスク・コミュニケーションでしょう。この部分は海外の方が進んでいると思うので、文化的な差異は考慮するとしても、学べる点は積極的に取り入れていきたいですね。

—レスポンスブル・ケア活動における今後の目標は？

**森本** 現在の活動を大きく変える必要はないと思っています。テクノアメニティという当社の企業理念を實踐し、自然環境と人間生活を調和させながら持続可能な発展に貢献することが目標ですね。これはレスポンスブル・ケアの理念とも合致すると思います。具体的には、事業活動を行う上で環境への負荷を極力低減し、一方、技術を駆使して社会に役立つ製品を提供していくことになるでしょう。



▲環境報告書 2002  
日本触媒のレスポンスブル・ケア活動



### 日本曹達株式会社

高岡工場

#### 高岡工場の概要

日本曹達高岡工場は、富山湾に面した高岡市の北部、小矢部川沿いに位置し、昭和9年に操業を開始し来年70周年を迎えようとしている敷地面積50万㎡、従業員約400人の化学工場です。この地域は化学、製紙、金属などの産業が古くから発展した北陸地方の産業の中心地でもあります。当工場の主な製品は苛性ソーダ、塩素、塩酸などの基礎化学品から殺菌剤「トップジン」、除草剤「NABU」、殺虫・殺ダニ剤などの農業化学品、第4世代抗生物質中間体「アセトキシアゼチジノン」「MAP」などの医薬品となっており、国内のみならず広く全世界に製品を送っています。

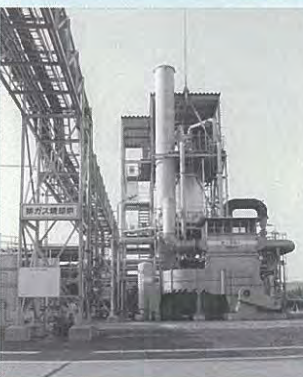


▲工場全景、南北に流れる小矢部川

#### レスポンスブル・ケア活動への取り組み

当社は1995年の「日本レスポンスブル・ケア協議会」発足当初から加盟し、関連会社を含め全社的にレスポンスブル・ケア活動を推進してきました。「社会から必要とされる企業を目指して」を合言葉に「持続可能な循環型社会の実現」を目指して、「環境安全・労働安全・製品安全に配慮」を基本政策として取り組んでいます。

#### 主な活動



▲排ガス焼却炉

#### 環境保全への取り組み

地球の大切な資源である大気や水を守るために、環境負荷低減に向けた有害大気汚染物質・産業廃棄物の排出削減や省エネルギーの活動などに積極的に取り組んでいます。

有害大気汚染物質の大気への排出削減対策として排ガス焼却炉を設置し、1995年度に比べて約55%

削減し、2004年までに85%削減の予定です。

活性汚泥設備からの余剰汚泥は、微生物自己消化設備による完全分解処理を専門業者に委託し、環境負荷のかからない処理を行っています。

日本曹達が開発した金属ナトリウム分散体によるPCB分解技術により、富山県から中間処理施設の許可を受け処理設備を建設し、当工場保管のPCBの無害化処理を昨年実施しました。

#### 安全衛生と保安防災への取り組み

労働安全衛生のマネジメントシステムとしてOSHMSの構築を開始し、リスクアセスメントによる事故災害の発生防止に取り組んでいます。

5Sの確保が災害防止の第一歩と位置付け「5S運動」を展開すると共に、製造プロセス、設備に関する設計・運転方法の検証・改良を継続的に行っています。また、過去の災害事例を従業員に繰り返し教育すると共に、再発防止対策が実施されているかを検証することで、事故の風化防止を図り安全の4つのサイクル「作業前にKY、作業中には指差呼称と相互注意、作業後はヒヤリハット抽出」を廻すことで災害を防止しています。

事故災害を未然に防止するだけでなく、万が一の災害発生時にも被害を最小限に食い止めるべく、緊急事態に備えた危機管理体制を整備しています。



▲防災訓練

#### 地域社会とのコミュニケーション

日本レスポンスブル・ケア協議会の富山・高岡地区の幹事会社としてレスポンスブル・ケア地域対話を積極的に推進し、本年2月には当地区の対話集会を開催します。また、近隣の皆さんの工場見学などを開催し、開かれた工場を目指した活動を続けています。

工場からの異音や悪臭の発生をできるだけ早く通報していただけるように、近隣6自治会の皆さんにお願いして環境モニター制度を実施し、地域の皆さんとのコミュニケーションを大切にしています。



▲小学生の工場見学時の化学の実験

### 三菱ガス化学株式会社

東京工場

#### 東京工場の概要

##### 都市型工場に変貌する東京工場

三菱ガス化学株式会社東京工場は、庶民的な下町である東京都葛飾区にあり西に中川、南に都立水元公園を展望する位置に、敷地面積約120,000㎡、従業員290名を擁しております。

大正7年に江戸川バリウム工業所として発足以来、その80余年の歴史を通じて、ホルマリンや多価アルコール等の工業薬品類、フェノール樹脂成形材料やガラスエポキシレジン原料としたプリント配線基板等の、電子材料製品を社会に提供してきました。

近年、循環型社会の形成へと移行する21世紀に、東京工場は「地球に優しい事業の構築」をテーマにBTRレジンを中心とした電子材料事業、単結晶磁性ガーネット膜を素材とした情報機能材事業、食品の鮮度保持を中心としたエージレス事業、クリーンな水作りを目指した環境薬剤事業等の環境機能製品の製造、また資源回収物の有効利用とリサイクル活動より生まれた、固形燃料(RDF)や園芸用保水性樹脂土壌材等の環境調和型製品の製造といった、都市型の化学工場として大きく変貌をとげています。



▲1995年



▲2003年

#### レスポンスブル・ケア活動への取り組み

当社は、「化学に基づく幅広い価値の創造を通じて、社会の発展と調和に貢献します」の企業理念のもとに、1995年の「日本レスポンスブル・ケア協議会」の設立に参画し、「環境・安全に関する基本方針」を制定して、操業と製品における安全の確保、環境負荷の低減、廃棄物の削減と省資源・省エネルギーの推進、製品安全情報の提供などのRC活動を積極的に展開しています。

#### 主な活動

環境の国際規格であるISO14001の認証を1998年に取得して「RC目的・目標」、「RC管理計画」を策定し、計画的に環境保全と安全確保に対する取り組みを実施しています。

##### [環境保全への取り組み]

環境保全に対する具体的な取り組み事例としては、工場の主事業体であった、重厚産業的ケミカルプラントのコンビナート地区工場への移転と都市型工場事業の誘致

等により大幅な危険物使用量の低減や省エネルギーを図りました。水質汚濁防止の観点からは、微生物による浄化を利用した、廃水処理設備による水質汚濁の防止徹底及び排出される有機汚泥についても肥料の原料としての活用を推進しています。



▲MGC 屋上緑化システム

また、ボイラー等への燃料として、化石燃料から都市ガスへの燃料転換により大気汚染物質等の環境負荷の排出低減を実施しました。

さらには、廃棄物の削減及び資源回収物の有効利用として、良質の廃プラスチック、紙・木屑を圧縮成形した固形化燃料の製造を行い、省エネルギーやサーマル熱量への有効利用を図っています。

最近では、構内から排出される資源回収物の有効活用をヒントに、園芸用の保水性樹脂の開発を行い、屋上緑化システムの構築や都市のヒートアイランド防止のための環境保全を展開しています。

##### [安全への取り組み]

保安防災、化学品安全に対する教育と訓練・啓発及び意識の向上を図っています。特に地域の防災を考慮した自衛消防隊組織の編成や環境安全防災訓練の実施、職場交換パトロールによる構内の安全チェックなどによって保安防災面に万全を期しています。また、今年度より工場の危機管理システムの構築を図るために、特別委員会を組織してシステムの構築を進めています。

さらには、化学品安全としてMSDSの最新版管理をはじめとする、「MSDS管理と活用の推進」及び「PRTRへの対応推進強化」を掲げ原料から製品に至るまでの安全確保と事故防止を図っています。また、物流安全として容器イエローカードを含めたイエローカードの使用により物流の安全を期しています。

#### 社会とのコミュニケーション

地域各種公共団体で実施される各種事業への積極参加及び年数回の地域住民や自治会との対話、工場の福利厚生施設(グラウンドや体育館等)の開放、さらには、地域に「開かれた工場作り」を目指しての、屋上緑化を含めた工場見学会を実施し、企業活動への理解を深める活動を実施しています。



▲工場見学会



## アジア諸国の レスポンシブル・ケア活動支援

その2

JRCCは、2001年より経済産業省のGreen Aid Plan (GAP) 資金援助を得てアジア諸国のレスポンシブル・ケア活動の向上のための支援活動を行っています。

2001年および2002年の2月下旬から3月上旬の2回にわたってタイ国のレスポンシブル・ケア活動の支援を行いました。

2002年10月21日～11月4日にかけて、2カ国目のレスポンシブル・ケア活動支援をフィリピンにて行いました。本支援は、フィリピン化学工業会 (Chemical Industries Association of the Philippines) からの依頼を受けて、フィリピンでのレスポンシブル・ケア活動状況調査および評価を実施しました。

支援の内容は、第1日目に日本におけるレスポンシブル・ケア活動の紹介およびJRCCが実施しているレスポンシブル・ケア検証の説明を行いました。

2日目から、フィリピン国内資本企業6社の現場を訪問調査しました。訪問調査は、事前に配布したチェックリストに基づき質疑応答により行いました。主な調査領域は、環境保全と労働安全衛生です。

最終日には、訪問調査結果の報告、参加者間で自己診断表の使用方法に関するワークショップを行いました。

この支援を通じて、フィリピンでのレスポンシブル・ケア活動に対して次の改善事項を報告しました。

- \* 各企業におけるレスポンシブル・ケア推進組織を正式に登録し、レスポンシブル・ケア推進責任者の役割、権限等を明確にすること。
- \* リスクアセスメントを実施して、RC実施計画の優先順位を明確にすること。



- \* 各分野における計画では、パフォーマンス指標を設定すること。
- \* 計画の目標を定量化すること。
- \* PDCAサイクルの中のチェック・アクションの部分を強化すること。例えば事故・設備故障の原因分析を十分に行い、その経験を活用すること。

フィリピン化学工業会は、1977年に設立され、会員は、74社。レスポンシブル・ケア活動は1996年から開始し、ICCA/RCLGメンバーです。2003年からレスポンシブル・ケア活動を推進するため検証制度の導入を計画中です。

### 訪問企業一覧

- インターナショナル・ケミカル・インダストリーベマーバル
- フィリピン・フォスフェイト・ファーターライザー
- ユナイテッド・ココケム・ケミカルズ
- マブヘイ・ビニール
- LMGケミカルズ



## ASEAN 環境保全研修に協力

経済産業省化学課からの依頼を受け、(財)海外技術者研修協会による標記研修にJRCC会員会社およびJRCC事務局が協力しました。この研修は、2002年10月28日から11月1日の5日間、東京を中心に行われました。研修生は、8ヶ国17名で、環境や産業政策を担当する政府関係者と化学産業界の方々です。

日本の化学企業におけるレスポンシブル・ケアの取り組み事例紹介として、旭化成(株)、三菱化学(株)、協和発酵工業(株)、日本ペイント(株)での活動を紹介しました。また、工場見学には、コニカ(株)日野工場、積水化学工業(株)武蔵工場にご協力いただきました。

## Index

レスポンシブル・ケア報告書2002報告会を開催	2
Voice	4
日本レスポンシブル・ケア協議会会長 中西 宏幸	
学生との対話集会を開催	5
from Members [第26回]	6
(株)日本触媒 常務取締役生産本部長 森本 豊さん	
RCの現場を訪ねて	8
日本曹達(株) 高岡工場 三菱ガス化学(株) 東京工場	
海外RC情報	10
第1回徳山地区レスポンシブル・ケア地域説明会を開催	11
JRCCだより	12

## 第1回徳山地区レスポンシブル・ケア地域説明会を開催

PRTR法(化学物質排出把握管理促進法)に伴う、国による「化学物質の排出・移動量の実態」データの公表を目前に控えて、2002年12月2日(月)、徳山市と市内10企業が協力して、地域住民や行政関係者及び教育関係者等を対象として、行政と企業の環境保全や保安防災等の取り組み及び国に届け出た化学物質の排出・移動量のデータについての説明会を開催しました。

PRTRデータの公表とそれに伴うリスクコミュニケーションの展開が今後注目されるのですが、今回の説明会はその初の試みと言えます。

説明会では、JRCC事務局による「PRTR制度の概要」説明の他、徳山市と4企業の発表が行われ、終了後は、希望者による出光興産(株)徳山製油所と出光石油化学(株)徳山

工場の見学会も行われました。

当日の参加者は、自治会関係 50、行政関係 7、教育関係 3、近隣地区企業 17、マスコミ 5など、合計198名でした。

参加者の声には、1) 誤解を招きやすい有害な排出物について、公開して理解を得ながら排出量を減らしていくという姿勢が良い、2) 身近な問題なのに、こんなに大切なことは思っていなかったことが恥ずかしい、などの肯定的なもの、3) 一般の人には難しい内容であり、説明が十分とは言えない、また、質疑応答の時間も少ない、などの改善を求めるものがありました。

いずれにしても、このような会が今後も継続して行われることが大切です。